

モームの想い出「一幕」

ガーソン・ケニン 作

(田原 創 訳)

登場人物

W・サマセット・モーム（一八七四―一九六五）は数多くの戯曲、長編小説、短編小説、随筆を書いたイギリス人作家である。パリでイギリス大使館付き事務弁護士の子供として生まれたモームは、十歳の時に孤児になり、ウイスタブル（イングランド、ケント州北部の海辺の町）の教区牧師である叔父の許に身を寄せた。彼はロンドンで六年間医学校に通ったが、最初の小説『Liza of Lambeth（ランベスのライザ）』（一八九七）の成功の後医学の道を退いた。小説『Of Human Bondage（人間の絆）』は主としてモームがロンドンやパリで医学生や作家としてもがいていた頃の自らの経験を引用している。モームは第一次世界大戦の間、赤十字のためにボランティア活動をしたり、イギリス秘密情報部のために働くなど、フランスとロシアで奉仕活動を行った。モームの作品は自分の広範囲にわたる旅行を反映している。『The Moon and Sixpence（月と六ペンス）』（一九一九）はゴーギャンのタヒチでの生涯を考察したものであり、『Ashenden（アシェンデン）』（一九二八）はヨーロッパにおけるイギリス人スパイに関するものであり、『The Razor's Edge（かみそりの刃）』（一九四四）はアメリカの復員軍人の国を越えた真理の探究を追っている。モームは一九三〇年代に最も稼いだ作家であり、『Rain（雨）』（一九二二）や『The Letter（手紙）』（一九二四）を含む作品の多くは映画化されて成功した。彼は一九一七年にインテリアデザイナーのシリィ・ウェルカムと結婚し、子供を一人、エリザベス（ライザ）をもうけた。一九二八年に二人は離婚して、モームはフランスに戻り、生涯フランスに住んで驚異的な数の作品を書いた。

ガースン・ケニン（一九二一―一九九九）は数多くの作品を書いた作家であるばかりでなく、舞台演出家、映画監督としても評価された。ケニンはアメリカン・アカデミー・オブ・ドラマティック・アーツ（アメリカの二年制の演劇学校）で訓練を受け、演劇界にデビューしたのは俳優としてであった。すぐに師であるジョージ・アボットの助力によって舞台演出家の職を得ると、まもなくRKO（Radio Keith Orpheum Entertainment：当時存在したアメリカの映画会社）の監督になった。初期の作品には『A Man to Remember』（一九二八）や『My Favorite Wife（ママのご帰還）』（一九四〇）がある。第二次世界大戦中、兵役についている間、キャロル・リードと共にドキュメンタリー映画『The True Glory（地上最大の作戦）』（一九四五）を監督し、アカデミー賞を獲得した。この成功に続いて、『Born Yesterday（ボーン・イエスタデイ）』（一九五〇）の脚本・監督を担当した。その後四十年以上にわたって、『Peccadillo』（一九八五）、『Remembering Mr. Maugham（モームの思い出）』（一九六六）、『The Rat Race（おぞまの競争）』（一九四九）、『The Smile of the World』（一九四九）を含む二十編の戯曲を書いた。また、メトロポリタン・オペラ（ニューヨーク、マンハッタンにある歌劇場）のために『Fledermaus（こうもり）』（一九五〇）（ヨハン・シュトラウス二世が一八七四年に作曲したドイツ語のオペレッタ）の英語版の脚本も書いた。一九四二年に結婚したルース・ゴードン（ア

アメリカ人の女優・作家」と共にアカデミー賞にノミネートされた『A Double Life (二重生活)』(一九四七)、『Adam's Rib (アダム氏とマダム)』(一九四九)、『Pat and Mike (パットとマイク)』(一九五二)の脚本を書いた。舞台と映画の脚本と演出を続け、フランセス・ハケット(ユダヤ人の女性作家)とアルバート・ハケット(フランセスの夫で同じくユダヤ人の作家・俳優)が脚色した『The Diary of Anne Frank (アンネの日記)』(一九五五)の初演を演出したのは注目すべきである。また、ケニンは小説家、伝記作家でもあった。著作には『Smash』(一九八〇)、『Hollywood』(一九七四)、『Tracy and Hepburn』(一九七二)がある。ルース・ゴードンは一九八五年に亡くなり、一九九〇年、ケニンはリアン・セルデス(アメリカ人の女優)と結婚した。一九九九年、ニューヨークの自宅で亡くなった。

設定…ロンドン、ニューヨーク、パリ、サン・ジャンーカップ・フェラ、ハリウッド

年代…一九三六年―一九六六年

集まった観客にW・サマセット・モームの全く同じ写真三枚が三面鏡のようにちようつがいでないように映し出されているのが見える。

上演前の十五分間、一八七四年から一九六六年までの流行歌の一部ずつを繋げて作った曲が年代順ではなくランダムに演奏される。

同時に、写真が一枚ごとに変わり始める。見えるのは二歳のモーム、九十歳のモーム、四十歳のモーム。友人たち、チャーチル（イギリスの政治家・著述家、首相（一九四〇―四五、五一―五五））、ショー（バーナード・ショー、アイルランド生まれのイギリスの劇作家・批評家）、エセル・バリモア（アメリカの女優）、チャップリン（イギリス生まれの喜劇映画俳優・監督）と一緒にモーム。そして、世界中のいろいろな場所、フランス、スペイン、日本、タヒチ、ロシア。

ごたまぜに見えていたものと音楽が終わる。

幕が開く。

ガーンソン・ケニン（ケニン）が舞台下手（客席に向かって右側）にスポットライトを浴びて立っている。

舞台上手（客席に向かって左側）は暗闇である。

ケニン

一九六五年十二月十五日。ビバリーヒルズ。サマセット・モームが亡くなった。

二、三分前、CBSの十一時のニュースの冒頭で、番組のハイライトとしてアウンサーが言った。

「天国の生とこの世の死。こういう話を、このお知らせの後で」

コマーシャルの間に、わたしはルースに言う。「彼が亡くなったんじゃないかな。そんなふうに聞こえる」

「そうね」と彼女は言う。

この五日間わたしたちが半ば予期しながら半ば恐れていたニュースを持ってアウンサーが再登場する。それでおしまい。わたしたちの親友はもういない。一つの時代が終わる。非常に教養が高くてはつきり表現することのできるものと穏やかだった時代とのきずなが断ち切られる。

「続けて」あらゆる偉人の死と同じように、彼の死は部分的な事柄に過ぎない。

彼のそこなわれた体はじきに灰になるだろう。彼の脳は意識を失い、魂は失わ

ケニン

れる。しかし、彼の最良の部分、作品は残る。さらに、幸いにも彼と知り合いになることができたわたしたちのような人間は、豊富な記憶という遺産を手にする。

彼は九十一年十月と十五日生きた。彼の晩年ほど執拗に生に執着する人がいただろうか？ わたしたちは皆、正気なら、そうするのが当然だと思われているとはいうものの、サマセット・モームが死ぬ一歩手前で奮闘するパワーには、彼を知る者全員が驚いた。彼の敵たちはそれを執念深いと言い、友人たちは勇敢だと言った。わたしたちはなぜ驚いたのか？ 長い人生行路の間ずっと、特に最後の三分の二の間、生きていくことを彼が皮肉な目で宇宙の悪ふざけだと見なしているように見えたからにすぎない。それを深刻に考えるのは愚か者だけだ、と彼は言っていた。

彼は九十一まで生きた兄、モーム卿のフレリックの例がきっかけになったのだと言う人たちがいる。また、勝手に百を目指していたのだと言う人たちもいるが、彼はバーナード・ショーに勝てれば面白いだろうと言ったと言われている。そして、ひょうきんな親友の一人が、モームは百二まで生きた気難しい義理の母、バーナード夫人より寿命が短いと思うととても耐えられなかったのだというようなことを言っていた。

舞台の反対側でマッチの火がつき、照明がゆっくりとついて大きな肘掛け椅子に座ってタバコに火を点けているサマセット・モーム（モーム）に当たる。モームの側には、灰皿のある小さなテーブル、ウイスキーのデカンター、アイスバケット、ソーダのサイホンボトル、電話機。照明が舞台全体に当たる。これ以降、照明の当て方は芝居の焦点の当て方に従う。観客の注意を引くべき人物に強めにし、他方には薄暗くする。

しかしながら、終始モームは肖像画でケニンは画家であることが思い出されなくてはならない。従って、照明は常にモームに集中していなければならぬ。

さらに、照明は話し手の言葉に合わせて、夜、昼、屋内、屋外を連想させるようにする。

ケニン

「続けて」一九五四年の冬、彼はロンドンのドーチェスター・ホテルに数か月滞在していた。ルースとわたしは彼を訪ね、彼が元気旺盛なのを見て嬉しかった。わたしたちが着くと、彼はテレビの前に座って、くだらないクイズ番組を見ている。

番組の音声が聞こえる。

モーム

すぐに終わる、だー、だろう。座りたまえ。飲み物を差し上げてくれ、アラン。

ケニン 「観客に」十分後、番組は終わりました。彼は跳び上がるようにして立ち上がりました——本当に跳び上がるように！

モームはそうする。

——ものすごい速さでテレビのところまで行き、その衝撃によってかのように音が出ないようにしました。

モームはそうする。音声が消える。

しかしながら、画面はついたまま、音を消されたことに欲求不満の状態で、その後一時間半、ぴかっと光ったり、ゆれ動いたり、あわただしく動いたり、急に動いたりを続けました。

モーム かー、構わんだろ？ わたしの知る限り、昼も、よー、夜もつけっぱなしなんだ。

どうしてですか？

ケニン モーム それは——あれが目新しいものだからだ。

モームは座る。

ケニン 「観客に」わたしたちは座り、ほぼ一年経ったお互いの情報を知るために話をしました。

「モームに」

ところで、わたしたちが最後にあなたに会ってから、面白い出来事がありましたか？

モーム ああ。わたしは、しー、死んだんだ。

ケニン 「観客に」最後の言葉はわずかに遅れてどもり気味で、いっそう衝撃的な効果がありました。

「モームに」

それでおしまいですか？

モーム まあまあ、君——君たちの誰にだって、素晴らしいドラマの始まりだということとが分かるはずだ。

モームはドリンクを一口飲む。

話の続きはこうだ。わたしは具合が悪くて、ローザンヌの——ローザンヌは素晴らしい所だが——病院に連れて行かれて、わたしがやってほしくない類のことをすべてやられた。わたしは一時間ごとにますます衰弱し、かなりの時間で眠らされた。ある種の外科処置が行われ、二、三日後、複数の医者が前より良くなっているという情報を伝えてくれた。ところで、わたしは自分が医者だ

から、それを信じなかった。ある若いアメリカ人のインターンが、どういう意味かはともかくとして「危機を脱した」というようなことを言って、現にわたしの肩をポンと叩いた。しかし、患者自身ほど患者のことを分かっている人間はおらず、わたしが患者はかくあるべきという役割を果たしていないのは知っていた――わたしは八十年間そうしてきたのだからね。彼らに話しても意味がなかった。彼らはみんないい奴で、できる限りのことをしてくれた。その夜、わたしは、ちー、鎮静剤を断わった。それがわたしをへばらせて、わたしから必要な体力を奪ってしまう気がしたんだ。わたしは衰弱し始めた。医者たちが戻って来た。わたしは腕と尻に注射針を感じた。一定の時間が過ぎた。一時間だったかもしれないし、一世紀だったかもしれない。明るさが変化し始めた。

モームに当たる照明が強くなる。

驚いたことに、暗くなったのではなく――明るくなったんだ！

モームに当たる照明は今や非常に強い。

それが虹色になって目がくらみ、脈拍が次第に弱くなって心臓の鼓動が遅くなっていくのを感じることができたが、明るさはなお強さを増して、今度はこの上ない安堵感が生まれて続いた。

モームに当たる照明がかなりの速さで消えていく。

驚いたことに、なー、長く続くオルガズムそっくりだったが、単なる生殖器のオルガズムではなくて――肉体、精神、魂など全部、すべての存在を捨て去る最後のオルガズムだ。わたしは終わりがきたと思った。そして、わたしはその終わりをそんなにも際立って喜ばしいものにしてくれたことを、しー、自然界に感謝したのを覚えている。

モーム

「続けて」「こんなのちっとも問題じゃない」とわたしは思った。「半時間歯医者椅子に座っている方がずっとひどい。まあ良しとしよう」と。わたしは自分に残された人生の最後みたいに心の中で思った。「わたしは十分楽しく過ごしてきた、大体において、それは非常に満足のいく経験だった」と。その時、何かわたしに手を放せと言った。それで、わたしはほほえんで手を放した。そうして、わたしは、しー、死んだんだ。

モームは吸いさしで新しいタバコに火を点ける。

つー、冷たい体温計が肛門に押し込まれて目が覚めた時の驚きようを想像してみてください。わたしはそこを出ると、なー、何か口汚いことを叫んで、一日中不機嫌だった。わたしはお茶の時間まで自分の幸運に気がつかなかった。今や、

ケニン

わたしは死がどんなものか知ってしまったのだから、もう恐れる必要はないのだ。わたしは死を正確に述べることができる——自然死は最後のリラクゼーション、それだけのことなんだ。お二人にもう一杯差し上げてくれ、アラン。

「観客に」一九五四年、八十歳のサマセット・モームはこんなふうでした……。わたしが側にいる時、周りの人たちのほとんどが彼を「ウィリー」と呼んでいました。わたしはそうする気になれない何かがありました。その理由は今でも分かりません。わたしにとって、彼は決して「ウィリー」ではありませんでした。一つには、わたしは彼の高年齢に畏敬の念がありました。彼はわたしより四十歳ほど年上でした。もう一つには、わたしの考えでは、彼にふさわしい名前ではありませんでした。(ヘンリック・イプセンを)ハンク・イプセンとか、(アウグスト・ストリンドベリを)ガス・ストリンドベリ、(アントン・チェーホフを)トニー・チェーホフ、(チャールズ・ディケンズを)チャーリー・ディケンズ、それに従って(ウィリアム・モームを)ウィリー・モームなんて思いも寄りません。ある晩フランスの彼の家で、わたしは彼の手を取って「今晚はご機嫌いかがですか、サマセット？」と挨拶しました。彼はわたしの手が火でもあるかのように手を離すと、怒ってそっぽを向いてしまいました。それはわたしの名前じゃないよ、君。わたしは友達には「ウィリー」なんだ。そんなことの後でも、彼を「ウィリー」と呼ぶことはできませんでしたが、二度と「サマセット」を使わなかったことは確かです。

一九四九年四月。ニューヨーク。

モーム ケニン

モーム氏は言葉がつかえる。どもりではない。言葉がつかえるのだ。つまり、一つの言葉を言い終える前に、「な、な、な、な、な」のように一つの音を何度も繰り返すことはない。そういうことではなく、発声器官が詰まっているみたいだ。詰まって。むしろ、「よー、夜」みたいな発音をする。ある晩、ロンドンのクラリッジ(ホテル)で彼が違いを実に詳しく説明してくれるまで、わたしはずっとどもることと言葉がつかえることが同じことだと思っていた。彼がかなりの時間をかけてその問題を考えたことは明らかだが、めったに論じることにはなかった。『The Summing Up(サミング・アップ)』(一九三二)、『Points of View(作家の立場から)』(一九五八)、『Strictly Personal(極めて個人的な話)』(一九四一)、『A Writer's Notebook(作家の手帳)』(一九四九)など、多くの自伝的作品の中でもほとんど言及していない。

「続けて」一九三二年、彼はアーノルド・ベネットの『The Old Wife's Tale(老妻物語)』(一九〇八)の特別版に序文を書いた。わたしは常々彼がベネットをややひいきしているのに気がついていた。

彼はベネットのぎこちなさや虚勢やけちなことをからかうような話をするのが好きだった——ベネットがかつて愛人を持ったが、節約のためにモームとシェアすることを提案した時みたいに！

それにもかかわらず、常に彼のベネットに対する感情のどこかに好んでいる感じ、同情心があった。わたしは今、それがベネットも言葉がつかえるという

ケニン

事実と何か関係があったのではないかと思う。ベネットに関するモームのエッセーのこの一節を考えよ。

モーム

アーノルドは実にひどく言葉がつかかえるのに苦しんでいた。時々、彼が言葉を発しようとしてもがいている様を見るのはつらかった。彼にとっては拷問だった。話すことが彼にもたらす疲労を理解している人はほとんどいなかった。ほとんどの人にとって息をするのと同じくらい簡単なことが、彼にとっては常に重圧だった。それが彼の神経をずたずたに引き裂いた。そのために生きる耐えがたい気持ちを屈辱、そのために大勢の前で起きる嘲笑、そのために生じる耐えがたい気持ちを知っている人はほとんどいなかった。上手な、面白い、あるいは適切なコメントを思いついても、言葉がつかかえるせいで台なしになる場合はあえて言わないようにすることのちよっとした苛立ち。そのことから生じる苦しい気持ち。他人との完璧な接触の妨げになることを知っている人はほとんどいなかった。言葉がつかかえるという自己反省を強いるものがなければ、アーノルドは作家になっただけでなかったということかもしれない。

ケニン

「観客に」モームはここでアーノルド・ベネットのことを書くと同時に自身自身のことを書いていたのだと思います。彼はこの問題に関する自分の気持ちを表現する奥ゆかしくも客観的で自分を出さない方法を見つけて、ちよっとばかり自分自身の苦悩の極まりをわたしたちに伝えているのです。

ケニン

「続けて」一九五四年十二月。ロンドン。
昨夜、モームは八十歳の誕生日の一環としてギャリッククラブ（ロンドンの有名人、特に演劇・法曹関係者の高級クラブ）から讃えられた。これほど祝われた人間はほかに三人しかいない。チャールズ・ディケンズ、ウィリアム・メイクピース・サツカレーとアントニー・トロロープだ。サツカレーをギャリッククラブの会員に推薦したのは自分の父、ロバート・モームだったということ。思い出して、モームは歳月の流れを感慨深く思ったに違いない。この式は厳粛で感動的なものだったが、落ち着かない緊張を強いられる始まり方だった。モームが紹介されて――

モームは立ち上がって舞台中央の前方に移動する。

モーム

スタンディングオベーションを受け、客たちがまた座ると、挨拶を始めた。会長殿。ギー、ギャリックの、かー、会員の皆さん。年を取るといふことには、美徳が、たー、たくさんあります。

間。

ケニン

「観客に」彼は間を置きました。つばを飲み込み、唇を濡らし、周囲を見回しました。間がもたなくなりました。彼は口が利けなくなつたみたいでした。間が長く、あまりにも長くなりすぎました。彼は下を向いて、テーブルの表面をじっと見ていました。

モームはそうする。

緊張からくる恐ろしい震えが室内に広まりました。彼は病気だったのか？ やり通せるだろうか？ やっと、彼は顔を上げました。
わたしは今、それが何か考えている、とー、とこです。

モームは椅子に戻る。

ケニン

一九五一年。サン・ジャンーカップ・フェラ。
モーム氏は食べるのが早い。わたしは遅い。特に、食べ物がこのように上質な時はそうだ。この二つの事実が一日二回の衝突の原因になっていた。モームはいつも真っ先に料理を出される。従って、彼の左側に座る人間は最後に料理を出されることになる。六人以上いると、自分の左の客が料理を出されるまでに、モームは自分の皿のものを一かけらも残さず食べ終わってしまう。それから、彼はナイフやフォークを置いてタバコに火を点け、みんなの皿を見回しながらいらいらしてタバコを吸う。初めてのランチの時、わたしは話をしようという間違いを犯したために、確かに遅すぎたのかもしれない。みんなが食べ終わっていた。彼はわたしを見た。
その料理、好きじゃないのかね？
もちろん、好きですよ。
だったら、どうして食べないのかね？
いただいているところです。

間。

モーム

そうなんだ。

ケニン

「観客に」でも、わたしは気を利かせて残っているものをががつと食べました。その後、テラスに出た時に、彼に言いました。
「モームに」世界の人間の摩擦の大部分はリズムの違いに起因するということに賛成ですか？

モーム

もちろん。女の方が食べるのが早くて男が遅い、たー、ために、ふー、深く愛し合っている男女が憎しみに満ちた関係に終わる気の利いた短いストーリーが思い浮かぶよ。

ケニン

書いたらどうですか？

モーム

もう短編小説は書かない。わたしは今、エッセイストで有名なんだ。

ケニン

それなら、そのテーマでエッセーはいかがですか？

モーム

面白いのができるだろうね。人間が行動する時のいろいろなリズムが相性に影響を及ぼすことは実に確かだ。自分と一緒に歩いている人が早すぎたり遅すぎたりすると、いずれの場合もこれほどいらいらすることはない。それと、カー

ドをやる時のリズムが合わないのは最悪かもしれない。ほら、我々カードをやる人間は誰だって、遅い奴には、いー、怒り狂ったことがあるんだ。わたしとしては、遅い奴とのゲームに加わるのはお断りだ。それと、肌の触れ合いやセックスのリズムということになると、リズムの調整が良好な関係に役立つが、調整に失敗すると関係は良くななくなると思う。リズムは、わたしが思うに、宇宙の仕組みの中の、しゅ、主要な要素だ。

モーム

「続けて」季節のリズムを考えてみたまえ。ほとんどすべての物がパターンの、く、繰り返しだという意味でリズムカルだということを考えてみたまえ。例えば、君の顔だ。わたしが君の顔の、ち、中央に線を引いたら、片側が同時に反対側の反復になるだろう。ほとんどの美しい木は左右対称だ。花だって。動物だって。美術品だって。心臓の鼓動だってリズムカルだ。

モームは心臓の鼓動をまねる。バ・ブーン、バ・ブーン、バ・ブーン。

そして、詩があればほど、じー、情熱的であるのも、音楽があればほど感動的であるのもリズムのせいだと思う。これから、形を作ることはちよつとした、はー、橋渡しにすぎない。リズムカルでないものは形式に欠けると言ってもいい。この考え方の周辺の言葉は、結局のところ、すべて同じことを言っているのではないだろうか？ リズム、形式、テンポ、ペース、構成、バランス。形式。それは、思うに、わたしの人生の主要な関心事だった。形式こそ。

ハワイアンが次第にはつきり聞こえてきて、次のエピソードの終わりまで続く。

ケニン

一九五三年。サン・ジャンーカップ・フェラ。

昨夜、クローデット・コルベール（フランス生まれのアメリカ女優）のパーティー——よりによってハワイアン・ルーアウ（余興が伴うハワイ料理の野外パーティー）で——南太平洋の雰囲気にもームは上機嫌になって、タヒチの話や世界のその辺りを旅行した話をした。

モーム

り、旅行は楽しくない。面白いが、楽しくは、なー、ない。

ケニン

それなら、どうしてあんなにたくさん旅行をするんですか？

モーム

もう旅行はしない。

ケニン

「観客に」わたしは、この一年、彼がロンドン、パリ、ウィーン、マドリッド、チューリッヒ、ベニスとアーバノに行っていたのを知っています。彼はこれをおかして呼んでいた意味での旅行とは呼ばないのだと思います。

モーム

だって、旅行するのは、ざー、材料を見つけたためだった。タヒチに行っていないなかったら、『月と六ペンス』を書いたと思うかね？ わたしがあそこに行ったのは、あの本のためだったと思ってる人がいる。実際はあべこべなんだ。あそこへ行ったから、あの本を書いたんだ。

ケニン

「観客に」晚餐の後、すぐにパーティーは盛り上がりました。

モームは舞台前方に移動し、床に脚を組んで座る。

わたしたちは皆、地べたに座る楽な姿勢に慣れてしまつて、それをやめるのが嫌でした。それで、這いまわったり、だらりと横になつたりしてゐる人がたくさんいました。自分の足で立つて状況に気を配っていたのはクロードットだけという時がありました。その時、そこに座つて、明らかに退屈しながらタバコを吸つてゐるモームが目にとまりました。彼はわたしに手招きしました。

モーム 座りたまえ。ここに。

ケニンはそうする。

君と知的な会話がしたいんだ。

ケニンはいいですよ。神は存在すると思いませんか？

分からんね。君が大いに考え抜いた、しー、質問を選んだことは分かるが。知つての通り、わたしは大変な年寄りで、世界の多くの場所で充実した生活を送つてきた。何千人もの人たちを知り、何十万人もの人たちと出会い、なー、何百万人もの人たちを見てきた。話をし、話を聞き、書いたものを読んだ——生涯を通じ、何らかの方法でその質問の答えを見つけようとしてきたと言ふのが正確だろう。今ここに至つて、わたしは死に、ちー、近づきつつあつて、答へとして言える最善の言葉は、「分からんだよ！　あまり満足な答へじゃないだろうがね？」

ケニンは

ええ。その不可知論の考え方は逃げ口上のように思えます。中庸を求めようとするより、はっきりした意見を持つてもらいたいと思ひます。こうした事柄——希望、信仰、信念——には、消極的な正しさよりも積極的な誤りの方がましだと思いませんか？

モーム そんなこと知らんが——「逃げ口上」つて言つたかね？

ケニンは

ええ。

モームは

どういう意味かね？
実際にはやらないための言い訳という意味です。昔は「言い逃れ」と言ひました——今は「逃げ口上」です。

ケニンは

「逃げ口上」ね。元は隠語かな？

モームは

恐らく。
全く、アメリカ英語つていう奴は！　感心するが、わたしには、かー、書けな

ケニンは

い。
「観客に」ブランデーが出されるところでした。彼はちよつと飲みました。わたしは断つて、話を続けました。

「モームに」

さて、ところで、神の話はどうなんですか？

モーム 逃げ口上は言いたくないが、わたしに言える一番ましな答えはこうだ。神が存在しようとしなかりうと、確かなことは言えないが、神の存在は、ほー、ほとんどありそうもないと思うと、いー、言いたい。

ハワイアンの曲が次第に聞こえなくなる。

ケニン

一九五一年。サン・ジャンーカップ・フェラ。
今日、とうとう、彼がわたしたちを書斎に連れて行ってくれる。独立した階段を上がって行く家の天辺にある。階段を上がりながら、建物のこの部分に付け加えたのだと説明してくれる。部屋は大きいが質素だ。あまり物をおいていない。一つの壁にある本はほとんど彼が書いたものである。ぐるぐる向きを変えさせられたので、方角がつかめない。高いところにいるのは分かるが、どの窓からも景色を見ることができない。

「モームに」

ニースはどっちの方角ですか？

モーム

「指差しながら」あっちだ。景色は遮断したんだ。この部屋は仕事用で、展望用じゃない。

ケニン

「観客に」この部屋は一枚の絵を除いて、唯一絵のかかかっていない部屋です。仕事机のずっと右手のキャビネットの上に——胸から上の——女性の肖像画があります。丸くて愛らしい顔、血色がよく、赤毛、生意気そうな表情。見たとたんに『Cakes and Ale (お菓子とビール)』(一九三〇)のロウジーが思い浮かびます。

「モームに」

これは誰ですか？

モーム

「落ち着いて」わたしが愛した女だ。

ケニン

「観客に」ペンキを塗った美しいドアがあつて、小さなテラスに通じています。彼はそれがタヒチにあつたポール・ゴーギャンの小屋の一つのドアだと教えてくれます。

モーム

見たまえ、ここ、下のところ——汚れてる部分を。彼の、いー、犬がおしっこしたところだ。でも、わたしにとっては大いに意味があるんだ——ゴーギャンのドアがわたしの部屋にあるということが。

ケニン

「観客に」彼が書き物をする机は普通のより大きいです。長さは八フィート(二四三・八四センチ)くらいだと思います。頑丈そうで、(身長が低いのに合わせるためだと思いますが)普通より二、三インチ(五・〇八―七・六二センチ)低くなっています。きちんと整頓されています。わたしはこの状態を褒めます。ありがとう。ここではほとんどの場合、わたし自身が自分の、せー、世話をしているのだから、その言葉を受け入れるとしよう。

モーム

「観客に」わたしたちは下に下り始めます。わたしは、彼がまたロウジーの肖像画をちらっと見るのに気づきます。カクテル。

ケニン

「観客に」わたしたちは下に下り始めます。わたしは、彼がまたロウジーの肖像画をちらっと見るのに気づきます。カクテル。

晚餐。彼が持っている絵の話。彼は、無事に持ち続けることがだんだん難しくなっていると言います。どれだけの期間にしろ、サン・ジャン―カップ・フェラを離れる時は、彼はいつも絵をニースの銀行の地下金庫に保管します。そして、彼の説明によると、当然のことのように、かの泥棒組合に正規料金を払っているということですよ。

「モームに」

かの何ですって？

モーム

ああ。泥棒組合だよ。ここコートダジュールには思い出せる限り、な、長い間あつたんだ。一九二八年に初めてここに来た時、ある委員会の訪問を受けた。彼らは実に礼儀正しく儀礼的で、わずかな料金を払えばわたしの財産は悪戯から免れるだろうと説明した。これには利益は含まれていないと彼らは強調した――誰の利益もね――しかし、必要経費がかかるのだと。

わたしの国では「みかじめ料」と言います。

ケニン
モーム

その通り。それで、わたしは彼らに、主義として、な、何も払うつもりはないと言ってやった。彼らは実に礼儀正しく――わたしは全員と握手して――彼らは立ち去った。二、三日後、家から盗まれたものがあつた。それが何だったか、は、話すつもりはないがね。その翌週は――さらに――芝刈り機と一台の車の車輪だ。翌月の初めに、また同じ委員会がやって来て、まるで前の提案が、な、なかつたかのように、例の、て、提案をした。今度は、わたしも受け入れた。

彼らにはずっと払い続けている。何回か料金はアップしたが、盗まれたものはない。もちろん、わたしが家を空ける時は、今でも絵を、ぎ、銀行の地下金庫に預けている。そうした方が、悪戯心を起こさせないからね。

モームはタバコに火を点ける。

ケニン

「観客に」彼はタバコを吸います。ヘビースモーカーで、喫煙を楽しんでいます。

モーム

わたしの肺は、二度結核にかかって、二度その病気に、う、打ち勝ったが、それで肺が強くなり、並外れて丈夫になったのかもしれない。とにかく、わたしは喫煙について何も、す、するつもりはない。ほんの小さなリスクでこれほど大きな楽しみを得られるものはほとんどない。喫煙そのものよりも、むしろ喫煙のことを心配することの方が病気の原因になる。

ケニン

一九四九年二月三日。ニューヨーク。
はつきり言うと、彼の毎朝の決まった仕事ぶり気になつていたので、今日、またそのことを聞いた。彼は、どんなことがあるかと、どこにいようと、八時に朝食を食べて、九時までに仕事を始めるんだと繰り返す言う。

「モームに」

でも、どうやってやるんですか？

モーム やることによってやるんだ。そのことについて考えたり、わー、話題にしたり、検討したり、分析したりしてやるんじゃない。分かるかね？

ケニン 次の作品は何ですか？

モーム それは、最後の自伝的な本を検討している。ほかのものは形式の違うものだ。エッセーかもしれない。もうエッセーを書く人はいない。残念だ。実に、いい形式なんだが。

ケニン 「観客に」その後、わたしは彼にまた芝居を書いてもらいたいという希望を述べます。

モーム いや、そのつもりはない。間違はなく、生きている限り、もう、けー、決して芝居を書くつもりはないよ。そうは言っても、あまり長生きしないだろうから、大した約束じゃないが。

ケニン どうしてそんなに確信できるんですか？ 今晩寝る直前とか、明日の朝ひげを剃っている最中に、今までで最高のアイデアがひらめかないって、どうして分かるんですか？

モーム もう芝居のカテゴリで考えることはないから、分かるんだ。それに、何にしたって、君の言うようにアイデアが「ひらめいた」ことなんかはないよ。わたしの場合は、むしろ、さー、採掘の問題だ。採掘と精錬だ。わたしが芝居に興味があった頃は、毎日一つは芝居のアイデアを発掘したものだ。二つとか三つもしばしばだった。確かに、大部分は、ひー、貧弱なものだった。だが、アイデアはアイデアだ。いや。もう、わたしに芝居はない。その全ての魅力をもってしても、演劇界はいらだたしい、腹立たしい世界で、子供じみた——魅力的だが子供じみた——連中でいっぱいだと思った。彼らのことは大好きだったが、しばしば尻を叩いてやる、ひー、必要があっても、どうやって叩くんだ、ほら、エセル・バリモア（アメリカの女優）を？

ケニン 「観客に」わたしたちはエセルのことを話します。彼は、告白によれば、一時期、彼女にどうしようもないくらい惚れ込んでいました。そして、彼は出発点に戻ります。

モーム 「悲しそうに」いや。もう決して芝居は書かない。

ケニン 「観客に」わたしは時代遅れの砂糖抜きバーボンのシングルをちびりちびり飲みながら、ワイン一杯で十分だった頃を思い出そうとしているのに——老モームは座って、大量のマティーニを一杯、二杯、ワイン、ブランデー、それら全部を一気に飲んでいました。夕食の間はずっとタバコ。夕食の後は大きな葉巻。わたしはと言えば、禁煙した最初の危なっかしい年を終えようとしていました。わたしは彼に、若い頃医学生だったことや、その後若い医者だったことで、生き方を——つまり、肉体的な意味で学んだかどうか尋ねました。これが彼の長生きの決定的な要因だったのではないのでしょうか？ 知識や経験と、病状を診断し、素早く兆候を認識し、自分の体をケアする臨床的な能力です。

ケニン 「続けて」彼は否定しました。彼は、医学的見地から言って、自分が今日生きているのは、マックス・ウルフという名前では今はアメリカ在住のある優れたオーストリア系ユダヤ人医師を見つけたことによるものだと言いました。

モーム 推薦してくれたのは、南フランスのうちの隣の、のー、飲んだくれだった。エルシー・メンドル（アメリカの女優、翌年九十歳で没）をここ何年も生かし、つ、続けているのも同じ医者だ——それが、いー、いいことだと思いかどうか知らんがね。だが、これは言わなければなるまい。人間の、せー、性質についてわたしが知っていることは、実を言うと、すべて医者としての研究と訓練、聖トマス病院での仕事から教わったんだ。

人間について、単に、か、体が教えてくれるものより多くのことを学んだ。そして、わたしが学んだことは——中でも一番重要だと思ふ教訓は——くー、苦痛は人間の精神を気高くしないということだ。ちっともね。苦痛は卑しき、憎悪、身勝手さ、冷酷さを、うー、生み、幸福だけが人間を気高くする。

ケニン 「観客に」しばらくして、彼の妻、シリーの話題が出ると、奇妙なことに、いや、単に奇妙ではすまされないことに、モームの顔色が変わり、すぐに声の調子が変わりました。ところで、わたしよりもルースの方がシリーのことをずっとよく知っていますが、わたしたちは二人ともずっと彼女が申し分なく気立てのいい思いやりのある女性だと思っていました。彼にそう言うてはいけない理由は見当たりません。

モーム ライザは、自分の面倒は自分でみるとか、何らかの方法で自活するという気持ちをほんの少しも示したことがない。

ケニン 「観客に」これはどういうことなんでしょうか？ わたしたちはちよつと前にシリーのことを話していたのに、もう娘、ライザのことに向かっています。彼は疲れてきたのでしょうか？ 酔っ払ったのでしょうか？ 話をやめるべきでしょうか？ それとも、シリーの話は無視しようと決めたということなのでしょうか？ 全くそうではありません。

モーム この不幸な状況は完全に、はー、母親のせいだ。社会的地位以外には全く興味を持ったことがない愚かな女。彼女は今も、今までも、ずっと俗物だった。彼女はライザが人生で間違いない結婚、よー、より重要なものはないと信じるように育てた。わたしが彼女を責めるのは、彼女のせいでわたしが人生で、とー、取り逃したもののためばかりではなく、彼女のせいでライザが人生で、とー、取り逃すことになるかとわたしが思っているもののためなんだ。

ケニン 「観客に」多少の努力といろいろなわざを使って、わたしたちは何とかこの話題を終わりにして、もっと好ましい話題に向けます。サン・ジャン—カップ・フェラの家の話です。

「モームに」

あそこはいかがですか？

モーム あそこを管理するには十二人必要なんだ。一年中、十二人だ。あそこは実に、うー、美しい建物で、住むには快適な場所だが、執筆するには良くない、ばー、場所だ。

ケニン どうしてですか？

モーム 世間の流れ、世間の人々、重要な出来事との接触がないからだ。あそこ自体は、知つての通り、休息や隠居には理想的だが、執筆する作家が住むのには、いい場所ではない。

ケニン でも、ほとんどの作家は、気が散ったり邪魔されたりせずに仕事ができるように、現実から離れて――入り込む場所を望んでいるんじゃないやありませんか？

モーム まあ、そうだ、時々は。一時的にね。わたしは住居、ずー、ずっと住む所のことを言ったんだ。そうじゃなくて、最大限想像力を働かせるためには絶え間ない刺激が必要なんだ。視覚と聴覚のね。わたしは、勤勉な仕事ぶりを神秘的に見せかけるような連中には我慢ならない。全く！ モルナール（ハンガリーの劇作家・小説家）はブダペストのカフェのテーブルで、け、傑作戯曲をいくつか書いた。そして、君の国のウイラ・キャザー（アメリカの女流作家）はパーク・アベニューの豪華なマンションに住んで、我々の言語で素晴らしい散文をいくつか生み出した。

ケニン 一九五四年。ロンドン。

今夜、彼はイタリヤ人について十把ひとからげにコメントするが、それにわたしはむかつく。

「モームに」

でも、それは一般論にすぎません。

そうかもしれないが、一般論なしに会話は成り立たないだろう。

ケニン 一九五〇年。ニューヨーク。

昨日の夜、会話が途切れている間のこと――

モーム 今ままで、わたしが、かー、感激して、いー、いたく感動した最近の経験を二つばかり話したいんだ。一つはつい先日、ニューヨークのプラザ（ホテル）の大レストランであったことだ。わたしはそこで友人と食事をしていて。支配人がやつて来て、わたしたちに素晴らしいクリュッグのボトルを提供してくれた。彼の説明によると、レストランにいるある紳士がわたしの存在に気づいて、わたしの作品から受けた楽しみに、け、敬意と感謝の気持ちを表すべく、この結構な品物を送ってくれたのだという。もちろん、わたしはそれを受け取って、お礼を言うために、その紳士はどなたか教えてほしいと支配人に頼んだ。支配人は、その方は少し前にお帰りになっており、自分が完全に出て行ってしまつたと言つた。この素晴らしい匿名の、し、親切にわたしがどれだけ感動したか、口では言えない。

モームはタバコに火を点ける。

二つ目の出来事は、何か月前、わたしがスペインを旅行している時にあつた。コルドバの素敵なホテルに一泊か二泊した。

ホテルを後にする用意ができると、わたしはバッグやなんかを車に入れて、フロントに戻り、か、勘定書きを持って来るように言つた。フロント係は言つた。

「モーム様、あなた様の勘定書きはございません」。どうしてこんなことになるのか想像もつかなかった。フロント係が続けて説明したところによると、ホテルのオーナーが、かねがねわたしの作品が与えた啓発に――それは彼が使った言葉だが――非常に恩義を感じていると表明しており、わたしを自分のホテルに迎えたことをとても光栄なことだと考えたので、今回無料のもてなしを受け入れていただくだけでなく、今後もコルドバにお越しになる機会があればいつでもそうさせていただきたいと懇願しているということだった。何年もの間、ずっと旅行をしてきたが、そんなことは一度もなかったから、わたしはその出来事にひどく感動したのかもしれない。

ケニン

「観客に」あなたが驚くことの方が驚きで、そういう出来事が初めてだったとは信じがたいとわたしは言いました。彼は、その点の記憶は確かだし、とにかく、一般にそんなふうに使われている理由が分からないと断言しました。

「モームに」

ヨーロッパでは文人が尊敬され、崇められていると聞きます。フランスでは、政府から助成金に相当する税制上の優遇措置を受けています。つい先日、読んだんじゃないかったかな、イプセン（ノルウェーの劇作家・詩人）が新聞を読むために行きつけのカフェに入って来ると、彼が入る時には店の全員が立ち上がり、著名な彼が自分の席に着くまで座らないといっています。そう、それは、ほー、本当だろう。

モーム

モームはほほえむ。

わたしは彼を一度見たことがある。

ケニン

イプセンを見たんですか？ どこで？

モーム

ベルリンのカフェだ。彼は入って来て、常に彼のために確保してあるテーブルに着いた。彼のいつものテーブルだ。本当のところ、彼はひどく怒って、いらして、不快そうに見えた。でも、その時は本当にそうだったんじゃないかな。

ケニン

一九四二年十一月。ワシントン・D・C。

モームは今、サウスカロライナにいる。某氏が彼を訪問する予定になっていた。ダブルデイ夫妻はモームにコテージと使用人、リリジャス（「用意周到な」の意味がある）という名前の兵役不適格者の農家の若者を用意しておいた。モームが到着して十日ほど経って、ダブルデイ夫妻を晚餐に呼んだ。とびきりのオニオンスープ、トリユイット・オ・ブルー（鱒のクールブイヨン煮）、カナル・ア・ロランジュ（鴨のオレンジ煮込み）、驚くようなサラダ、アーモンドスフレが出て来ると、彼らはびっくり仰天した。キッチンに誰がいるのか想像できなかった。もちろん、リリジャスで、ほかには誰もいなかった。モームが彼に教え込んだのだ。ダブルデイ夫妻はこの出来事を国中に触れて回ったが、誰も信じたがらない。

ケニン

「続けて」一九四三年三月。ワシントン。

ルースが週末にニューヨークでモームの娘、ライザに会い、二人はあの有名なダブルデイの晩餐の話をした。ライザはちっとも驚かない。

「ええ、そうよ」と彼女は言う。「パパはいつもコックやメイドに教え込んで、家がきちんと回るようにするの。パパはそういうことはすべて知ってるわ。自分ではできないけど、どうやればいいか、ほかの人にどうやらせればいいか知ってるのよ」。

一九六〇年。ビバリーヒルズ。

チャーリー・ブラケット（アメリカの小説家・映画脚本家・映画プロデューサー）がモームの話をする。出所は怪しいかな？ この場にふさわしい話だろうか？ 申し分ない話だ。彼の話では、キュナード夫人がある時モームを晩餐でもてなしたという。

話をはしよると、モームはおいとましなければならぬと言った。キュナード夫人は異議を唱えた。モームは言った――

ユース（若き）を保ちたければ、寝なければならぬでね。

「観客に」すると、キュナード夫人は言いました。「それでしたら、どうしてユース（若者）をお連れにならなかったんですの？ あたくしたちでしたら、ユースとご一緒するのは大好きですのに！」。

数年後、モームと二人だけになったので、この話を繰り返して、この話には多少なりとも本当のところがあるのか尋ねました。

モーム ああ、少しはね。あれはわたしが、ギー、ギャリック（劇場）で耳にしたジョークで、キュナード夫人に話したんだ。あの時、彼女は、わたしを主役に、しー、して、そのジョークを再現したんだろう。彼女の狙った効果は分かる。彼女の言い方が――ずー、ずつといいことが分かる。

ケニン でも、そんなことをされて、あなたは怒らないんですか？

モーム いやいや。始終、推敲とか置き換えのテクニクを実践するのに明け暮れてきたから、わたしは一番腹を立てそうもない人間だろう。我々はみんなそのテクニクを使う。T・S・エリオット（イギリスの詩人・劇作家・文芸批評家）はそれを――実にうまいと思うんだが――「客観的相関物（読者にある感情を喚起する状況・二連の事件・事物などを指す）」と名付けたんじゃないかな？ 一九五四年。ロンドン。

ケニン 彼は以前よりもタバコをたくさんタバコを吸っている。わたしはそれにきがついて、そのことを言う。

モーム ああ。失った時間を、とー、取り戻そうとしているんだ。

ケニン どういうことですか？

モーム それは、去年病気になって、医者から少なくとも三か月は禁煙するよう約束させられた。わたしは禁煙して、自分がここ何年もの間より、ずー、ずつとみじめなのに気づいた。楽しいことが何もなかった。わたしのリズムは、めー、滅茶苦茶になり、反射神経は害された。猫の肉同様卑しくなったが、あいつに脅されていたものだから、禁煙を続けた。ひと月経って、わたしはタバコの危険性よりもタバコの、けー、欠乏で死ぬだろうと思った。それでも、禁煙を続け

た。一月四日に禁煙して、三月四日まで全くタバコを吸わなかった。今や、全体の三分の二までできていたので、禁煙をやめた。英仏海峡を泳いで渡る人が三分の二泳いだのと同じくらい恥ずかしくなかった。あの糞医者は、三か月やめれば二度と、すー、吸いたくなくなるだろうと断じた。彼は間違っていた。わたしは、まー、ますます吸いたくなくなった。それで、ご覧の通り、また吸っているんだ。何の弊害も感じないし、わたしの優しい、せー、性格が戻ってきて、すべてがうまくいっている。

ケニン
でも、三か月禁煙していれば、二度と吸いたくならなかったかもしれない。今となつては、分らないでしょうが。

モーム
まー、全くうんざりするようなことは言わないでくれ。

ケニン
あなたは医者と争いを始めて、負かしました。ブリッジのゲームのように出し抜いたんです。

モーム
黙れ。

ケニン
でも、負けたのは誰でしょうか？

モーム
黙れっつら！

ケニン
一九五〇年。ニューヨーク。

彼は買い物をしてきたところだ。

モーム
わたしはニューヨークで買い物するのが大好きだ。世界の中でも断然、しー、商品の種類と数が多い商店の集まりだ。メーシーやブルーミングデール（いずれもデパート）、特にエスカレーターに乗ってわくわくするのはたまらない。最近、一日のうちに、メーシーでパジャマを、グリステイード（スーパーマーケット）で特大の缶詰を、ローゼンバーグ（画廊）でルノワールを、マックス・シュリング（植物園）でゴールデンバンタム（果穂が小さくあざやかな黄色の果粒をつける甘味トウモロコシ）の種を買った。どうして、そんな一日が可能な街を、わー、悪く言えるかね？

ケニン
一九五四年十月。ロンドン。

モーム
恩知らずだとか、感謝知らずだとか、無礼だとか思われる危険があるのであんまりおおっぴらには、いー、言えない話を君にするが、それはこの長老というやつが実にうんざりするものだということだ。わたしは全然自分が長老だという気は、しー、しないが、それを言うに興ざめだろう。だが、わたしは興ざめな人間になりたくはない。我々イギリス人は老人が好きだ。王様だろうと、女王だろうと、プリマドンナだろうと、が、画家だろうと、老人を飾り立てて称賛するのが好きだ。年を取っていれば、立派で——ストラディバリウスとか、骨董品みたい——価値があるんだ。フランス人は老人に寛容で、その方が——わたしには、よー、より賢明に思える。アメリカ人が老人を無視するのはさらに賢明で、アフリカの部族はあっさり老人を投げ捨てるが、それが一番賢明だとわたしには、おー、思える。自分の年齢と、ど、同時に病気に注意を向けられることがどんなにばつの悪いことか分からないのか？ そういう問題はわたしの、せー、責任じゃない。わたしの目が見えにくくなったり、耳が聞こえにくかったり、肌が荒れてワニ皮みたいになるのはどうしようもないし、そ

ういうことに注意を向けられるのは嫌だ。実際のところ、老人が一番望むのは、ほー、放っておいてもらうことなんだ。ほら、そんなこと、おおっぴらに言えるかい？

ケニン

一九五八年。ニース。

今夜、モレスク邸でトラブル。わたしはソーントン・ワイルダー（アメリカの劇作家・小説家）のことと彼から受けた無数の恩義のことを話していた。彼は親切なしっかりした師であつたし、わたしが思うに、ほかの誰に対してよりも、わたしに尽力してくれていた。

ケニン

「続けて」その絶大な人気と文学的名声にもかかわらず、アメリカではそれ相応の評価を受けていないとわたしには思える。ちなみに、これは今も今までも彼の政治的意識が高くないことの結果ではないだろうか。彼はずっと学者や教師であつて、社会的な人間というよりもむしろ学究の徒であつた。

モーム

それとこれと、かー、関係があるというのが分からない。

モームはいらいらしてタバコに火を点ける。

ケニン

でも、作家はその時代を映すと思われていませんか？ チェーホフは政治的意識が高くありませんでしたか？ デイケンズは？ アーネスト・ヘミングウェイは？ ほかはどうでしょう——

モーム

くー、くだらない！

「観客に」——彼は言葉を発音するのにさんざん苦勞してから叫びました。それでも、その迫力に完全には満足しておらず、またもつと高い荒々しい声を発しました。

モーム

くー、くだらない！ 作家が政治家や学者であるなんて、こんな考えには、いー、嫌気が差す。政治家は一つの職業だし、文筆業もそうであつて、真の意味でその二つに関係があるというのは解せない。作家が、おー、愚かにも政界の人物でも登場人物に選ばない限り。あるいは、政界の人物が心得違いにも物を書かない限りね。わたしは今やっていることを随分、なー、長い間やってきたから、自分の言っていることが、わー、分かっているのは確かだ。

ケニン

「なだめるように」きつとそうでしょう。

モーム

「皮肉っぽく」おお、そうかね？ こういう、自分をいろいろな、しー、主義

主張にすっかり巻き込んで、そういうことについての感情を作品に反映させるような善意の人間の問題は、たちまち時代遅れになる危険を冒しているということだ。主義主張は変わる、分らないか、論点にしたってそうだ。そして、永続的なものの代わりにこれらを用いるとすれば、作品自体が古新聞や、ふー、古雑誌になる。ウエルズやゴールズワージー（どちらもイギリスの小説家）を見たまえ。そうそう、デイケンズがあらゆる種類の状況と条件を利用したのはその通りだが、それで彼が偉大になつたのでも、作品が生き残っている訳でもない。我々は社会的な意味とか統計的な尺度で判断する不正は大して気にしないんだ。

ケニン

「観客に」彼の激情は、言葉がつかえなくなるほどです。通例、彼は興奮すると、言葉がよりつかえるようになるのですから不思議です。しかし、今は、「統計的な尺度」のような難しい言い回しさえ明らかに簡単に発音するのです。

モーム

わたしは物語作家だが、それを言い訳にする必要は感じない。まことに榮譽ある職業だ。わたしが語る物語が世界の悪を矯正するとか、人間が悪人よりもむしろ善人になるように促すなどとうそぶく必要はない。もしそうなるのなら、そうなくても構わない。わたしの物語の中には、逆効果になるものや、善人を悪人にしてしまうものもあるかもしれないが、それはわたしの知ったことではないんじゃないだろうか。わたしは思い浮かんだ通りに、感じたままに物語を語らざるを得ない。わたしは、人が何かに巻き込まれること、最近新しい連中が好んで言う「引き込まれる」ことに異存はない。だが、それを仕事に混ぜ合わせるのは危険だと思う。

ケニン

「観客に」彼はしばしば、冷たくて冷酷だとか、無関心で無感覚だと言われてきました。わたしはそう思いません。感じやすく、あるいは敏感すぎるように思えます。そして、時として深く感動する傾向があります。

一九五〇年。ニューヨーク。

今朝、モームから電話。

モーム

「電話で」着いてすぐ電話しなくてすまなかったが、実は、首にした、しー、執事が住所録を燃やしちまったんだ。一冊残らずだ。あー、あいつの復讐だったんだ。

あいつは二十五年くらいわたしのところにいた。一年ほどで、役に立たないのは分かっていたが、なぜか首にする機会ができるまで時間がかかってしまった。ち、ちよつとばかり残念だ。だって、新しい住所録を手に入ればいいし、必要なら、新しい友人を載せることだってできるが、新しい、しー、執事をみつけるのは、もー、もつと難しいだろうからね。

ケニン

一九五三年九月。サン・ジャンーカップ・フェラ。

わたしたちは、タイロン・ガスリー（イギリスの舞台演出家）の演出でルースが主演するソーントン・ワイルダーの『The Matchmaker（結婚仲介人）』（一九五四）の上演に向けて重要な動きをしていたロンドンから戻って来たところだ。

彼は誰が上演するのか尋ねる。わたしたちはタイロン・ガスリーの名前が彼にとつてもはや何の意味もなさないことにびっくりする。

モーム

むー、難しい芝居みたいだ。彼がふさわしい人間だといいが。

ケニン

「モームに」彼が今どこでだって活躍できるだけの素晴らしい舞台演出家なのは確かです。これはたまたまわたしがエキスパートであるテーマの一つですから、信じてください。トニー・ガスリーはこの芝居で驚くほどの素晴らしい演出をするでしょう。

モーム

そうか。それなら、おー、大いに興味がわく。君の自分がエキスパートだと思っっているほかのテーマが何なのか知ることの方が、よっぽど興味がわくがね。

ケニン 「もったいぶって」そりゃもちろん、わたしはマーク・トウエイン（アメリカの作家）、アメリカのジャズ、ガートルード・スタイン（アメリカの作家）、栄養学、禅宗、ベンジャミン・フランクリン（アメリカの政治家・外交官・著述家・物理学者）、映画、セックスのエキスパートです。

モーム そうなの？

間。

ケニン フー、フランクリンについて君が知っていることを全部話してくれ。

一九五三年（回想録では一九五四年四月になっている）。ロンドン。

モームが夕食に来る。わたしは彼にマティーニを作る。

ケニンはモームのところへマティーニを持って行って渡す。モームは一口飲む。モームに。

大丈夫ですか？

モーム いいや。大丈夫じゃない。

ケニン おや？ どうしたんでしょう？

モーム 十分に冷たくない。マティーニはうんと冷たくなければいけない。

ケニンはマティーニを取って去ろうと歩き出す。

どうするつもりなんだ？

ケニン 「立ち止まりながら」それは、もっと冷たくするつもりです。

モーム 一体、どうやって冷たくするつもりかね？

ケニン 混ぜ直します。もっと氷を入れて。

モーム そんなことしたら、水っぽくなってしまふ。

ケニン 「観客に」その頃はもう、それどころではなくて、彼めがけてそのマティーニを投げつけそうになっています。

「モームに」

それじゃ、どうか、どうすればいいのか教えてください。

モーム 教えてやろう。

モームは立ち上がって、舞台後方へ行く。

ケニン 「観客に」わたしたちは書齋に入って行き、そこで彼は手短かに、簡潔にマティーニの作り方を教えてくれます。一から始めて、グラスを冷やし、シェーカーを冷やし、各材料を測って、かき混ぜずにシェイクして、注意深く混ぜます。最後に、ほんの二、三秒の間に、大きな氷の塊を加えて、二回シェイクしてから注ぎます。

モームがマティーニを二つ持って戻る。ケニンに一つ渡す。

とても素晴らしいので、わたしも一杯飲みます。

二人は飲む。

彼の言う通り、全然違います。

モームは自分の椅子に戻る。

この時以来、わたしは常にモーム氏が満足するマティーニを用意できました。数年後、彼の教えに改良を加えることができました。それ以前に、わたしはワシントン・D・Cの酒にうるさい酒飲みを何人か訪ねたことがありました。彼らはマティーニが薄くなるのを恐れて、絶対に氷が中身と接触しないようにしていました。マティーニ用のシェーカーを用意し、一時間かそこら冷凍庫に入れてました。マティーニが客の前に出てくる時は、氷のように冷たくて最高の濃さでした。わたしはこの重要な情報をモームに伝えました。彼はすぐにこの方法を試し、まことにありがたいということに加えて君から教わったことでは大いに飲みましたが、たくさん食べたので思ったほど酔いませんでした。もつとも、ひどく大声になってしゃべりすぎましたが。

「続けて」幸いなことに、ひどく分別をなくしていたので、しらふだったら思いつかず、絶対に聞かないような種類のことを全部質問しました。例えば、ロンドンの演劇界は同性愛に支配もしくは管理されていると思うかどうか尋ねました。

多少はね。

大部分じゃないでしょうか？

いや。

この影響は増大しつつあるんでしょうか、それとも、減少しつつあるんでしょうか？

増大しつつある。そう思う。

それじゃ、これはいいことですか、それとも悪いことだと思いますか？ また、どっちにしろ、それは問題じゃないと思いますか？

ひー、非常に不幸なことだと思う。そして、できることなら、抑制すべき事柄だ。

どうしてですか？

モーム　　じー、女性をだめにするからだ、分からんかね。女性を冷徹に、むしろ皮肉屋にする。女らしさに対するご褒美がないと、当然のことながら、女らしさは育たない。

ケニン 「観客に」その後、わたしは彼に、あなたのお考えでは、ご自分はライザに
っていい父親でしたかと尋ねます。

モーム そうあろうと努力したことは確かだ。

ケニン 「モームに」いや、わたしがお聞きしたのはそのことじゃありません。

モーム それはよく分かっている。彼女と状況が許す限り、わたしは、いー、いい父親
だったと思う。いつだって、彼女を、必要とあれば子供たちも養ってきた。何
の義理も、ぎー、義務も求めたことはない。わたしは彼女が好きだ。だが、忘
れないでくれ、あの子はいつもどこか混乱していた。そして、他人がどう思っ
たにしろ、思っているにしろ、わたしはずっと母親があの子に悪い影響を与え
ると思っていた。

ケニン もっと子供がいればよかったですか？

モーム ああ。そう思う。子供は実に興味深いし、非常に多くのことを、おー、教えて
くれる。子供はわたし自身について教えてくれる——ほかの方法では教われな
いことをね。

ケニン 父親の第一要件は何だと思いますか？

モームは考える。

モーム いー、いい手本を示すこと、それだけだね。

ケニン ライザにそうしたと思いますか？

間。

モーム いいや。

ケニンはモームの近くに移動する。

ケニン 無分別な質問をしてもいいですか？

モーム やれやれ、そろそろ分別のある質問をされる、こー、頃だと思ってたんだが！

ケニン あなたは今までに何回結婚の申し込みをしたんですか？

モーム 一回だ。

ケニン 「失望して」ほう。

モーム 何だって？

ケニン それじゃ、あまり面白くないですよね？ プロポーズが一回で、結婚も一回だ
なんて。

モーム わたしが、プー、プロポーズした女に断られたとでも言った、ほー、方が面白
いのかね？

ケニン ええ、そうです。

「観客に」そして、それから彼はわたしに大恋愛の話をしてくれます。『お菓子
とビール』の初版から二十年後に書いた序文で、モームは言っています。

モーム 「わたしが『お菓子とビール』が好きなのは、ページをめくるたびにロウジー・ドリッフィールドのモデルだった女がその愛らしいほほえみを浮かべてよみがえってくるからだ」。

ケニン 「観客に」彼は、この女（実生活ではナン）との出会い、初めて愛を知ったこと、二人ともそれが二、三週間で燃え尽きてしまうような突発的な欲情の噴出だと思っていたことをしみじみと感動的に語ってくれます。それにもかかわらず、その恋愛は八年間も続きました。

それからは、喧嘩、思いもしなかったやっかいな問題、結婚についてのためらい。彼女は逃げ出して、どこにいるか知らせません。しばらくして、彼はやっきになって捜し始め、アメリカまで、シカゴまで追跡します。もう気持ちは決まっていて、指輪を買い、シカゴに行つて彼女を見つけ、プロポーズします。彼女は断ります。彼は唾然としてとても信じる事ができません。何かの冗談で、からかっているんだと思います。

モーム 彼女は「あなたとは結婚できないわ」と言うだけです。どうして？ もう結婚してるの？

ケニン 「ナンみたいに」「いいえ、してないわ」。

モーム 誰かほかの男を愛してるの？

ケニン 「いいえ」。

モーム 僕を愛してる？

ケニン 「ええ。心の底から」。

モーム 僕が君を愛してるってこと、信じてくれるよね？

ケニン 「ええ」。

モーム それなら、どうして？

ケニン 「あなたとは結婚できないのよ！」。

「観客に」彼はシカゴが危険で物騒な町だと知っていたのでなおさらですが、すぐに彼の医者としての心が臨床的な方向に向かったと言います。

病気なの？

モーム 「いいえ、全然」。

モーム 結婚のこと考えてくれないか？ 考え直してくれないかな？

ケニン 「できないわ」と彼女は頑なに言います。

「観客に」訳が分からなくて、彼は苛立ちました。彼女をどなりつけました。一悶着ありました。無駄でした。二人は別れました。何年も何年も後になってから、彼女が彼に語ったところによると、あの出来事は、彼がやっとプロポーズした時、彼女はほかの男の子供を身ごもったことを知ったばかりだったということなのです。偶然の出来事、思いがけない出来事。でも、そうだったので。

ケニン 「続けて」今夜までモームが目には涙を浮かべているのを見たことはなかったと思います。この話の終わりに差しかかると、そこには涙があります。

モーム その子供は生まれなかった。流産したんだ。でも、わたしたちの時間は過ぎ去ってしまった。そう。彼女はつい二、三年前に、しー、死んだよ。

間。

もしあの、キー、気まぐれな偶然がなかったら、わたしの人生はどんな道を辿っていたのだろうかと、しばしば思うんだ。

ケニン 一九五三年。サン・ジャンーカップ・フェラ。

今日の午後、モームの家でタイトル話。

「モームに」

わたしはあなたの作品のタイトルの大部分は結構好きですが、『Of Human Bondage (人間の絆)』は好きじゃありません。まあ、ただだけないところがありません。

モーム そうかね？ わたしは、キー、結構いいと思うが。

ケニン 「結構いい」というのは「いい」とは言えません。

モーム 君なら元のタイトル『The Artistic Temperament of Stephen Carey (ステイヴン・ケアリの芸術的気質)』の方が好きかもしれない。

ケニン とんでもない。

モーム 何がやるか分からないものだ。あの、ほー、本を書いた時、最初のタイトルが理想的だと思ったが、改訂した時も、新しい、なー、名前をつけようと決めたんだ。

ケニン 「観客に」突然、わたしは、アラン・ジェイ・ラーナー（アメリカの作詞家）が『人間の絆』がミュージカルになると聞いた時のジョークを思い出しました。

アランはあるタイトルを提案していたので、わたしはモームに伝えます——『Worst Foot Forward』（直訳すると『悪い方の足を前に出して』となり、主人公フィリップの内反足を指すと思われる。慣用句として「ぶざまなところをさらけ出して」の意になる。）です。モームは冷ややかにわたしを見るだけです。彼はこのしゃれが気に入りません。

「モームに」

さあ、このしゃれがおかしいと認めてくれなきゃ。

モーム わたしが？

ケニン 「観客に」話変わって。

「モームに」あなたが知識人は三十歳を過ぎると実際本を読まなくなると言うたのは本当ですか？

モーム もちろん。ほー、本当に本当だ。

ケニン でも、あなたは始終読んでいますよ！

モーム わたしが知的じゃ、なー、ないからだ。

ケニン あなたは知的だと思いますよ！

モーム それは、君が知的じゃ、なー、ないからだ！

ケニン 一九五四年。サン・ジャンーカップ・フェラ

昨夜の訪問は、モームがちょうどスイスのニーハンス博士のクリニックから戻ったばかりだったので、特に面白かった。彼とアランは二人とも斬新で画期的な治療を受けてきたのだ。

モーム 変な感じなんだ。それ以外には、いー、言いようがない。変なんだ。自分じゃないみたいで。気分が悪い訳でも、特別いい訳でもない。ただただ——そう、変なんだ。

一つには、何週間もアルコールを飲まなかったことと、ター、タバコを吸わなかったからじゃないだろうか。だって、それもすべて治療の一部なんだから。

ケニン 「観客に」皮肉っぽく言うと、それが治療の主要な部分か、治療そのものではないかと思いますが、わたしは何も言いません。

モーム モームに変わった様子は見えません。彼は長々と、ニーハンス博士のことや、法王がこの治療を受けたとか、チャップリンとアデナウアー（コンラート・アデナウアー、西ドイツの初代首相）が受けているという噂について話してくれます。ほかにたくさんさんの名前を挙げて、その治療がどういうものか説明してくれます。一種の輸血みたいなものようです。わたしには荒唐治で危険に思えますが、一体どういうことなのか、わたしには分からないことなので、コメントは差し控えます。彼とアランが徹底的に調べてからのことです。二人揃って出掛けて行ってその治療を受けたんですから、良しとされたのに違いありません。モームは長々と生き続けたいのだと思います。彼がどんなに否定しても、しょっちゅう定期的にドイツやイタリアに治療を受けに行き、ダイエットに気をつけて運動をしているのが、今度はこれだと分かります。

モーム まー、全く意味がないのは分かってるし、いつだってこういう、らー、乱暴なことには、死に至る危険はあるが、わたしのような高齢になると、こういうことがやってみる価値のある危険、立派な賭けに思えるんだ。多少なりともやってみるだけの価値があるかもしれない。もしそうなら、結構だ。そうじゃないとしても、まあ、わたしは長い年月を賭けで失ったということじゃないかね？

ケニン 「観客に」今夜、わたしたちがダイニングルームを出る時、わたしは立ち止まって、出入り口の右側の壁に掛かっている変わった絵を見ます。二、三分経つて、わたしは独りではないと感じます。左後ろに誰かがいるのに気づきます。わたしが振り返ると、モームがわたしをしげしげと見ています。彼はタバコを吸っています。

モーム 君は絵に関することは、まー、全く知らないんだね？

ケニン ええ、そうです、でも、どうして分かるんですか？

モーム その絵を見ている様子で、わー、分かるよ。

ケニン 本当ですか？

モーム ああ、ケー、ケネス・クラーク（イギリスの美術史家）が見ている時に、絵に関することはすべて知っていることが分かるのと全く同じようにね。

ケニン 「観客に」わたしの無知が話題になるのは何となく面白くないので、わたしは間を持たせる会話をします。

「モームに」これは誰が描いたんですか？

モーム ケネス・クラークは聞かなかつたよ。彼はすぐ分かつた。
ケニン そうでしょうとも。

モーム 実は、トゥー、トゥールーズ・ロートレック（フランスの画家）なんだ。

モームはケニンの腕に触れる。

きー、気を悪くしないでくれ。言い当てられるのはごくわずかだ。ケネス・クラークでさえ、三分かかつた。さー、最後にわたしの方を向いて言った。「わたしがその作品を知っていて、あの頭やあの腕を描ける画家はトゥールーズ・ロートレックです」と。

ケニン 「観客に」それで、予定にはなかつたことですが、彼はわたしを連れ回してコレクションを見せてくれます。

次の間、モームとケニンは動き回って絵を見る。時々、立ち止まる。

「モームに」

マティス（フランスの画家）ですね。

モーム 万歳二唱（まあまあ）だな。

モームとケニンは再び立ち止まる。

これはマリー・ローランサン（フランスの女性画家・彫刻家）が描いたわたしの肖像画だ。

モームとケニンは肩を並べて立ち、その肖像画を見る。

ちつとも、にー、似てないが、面白い絵だ。

ケニン ピカソ（スペイン生まれのフランスの画家・彫刻家）が描いたガートルード・スタインの肖像画が似てないと誰かが異議を唱えた時、ピカソは言ったそうです。「ご心配なく、そのうち似てきます！」って。

モーム 「笑う」かつて、誰かがマティスの、えー、絵を批判して、女らしく見えないと言った。すると、マティスは鋭く言い放った。「女だと思ってもらつてはいけない、えー、絵だと思ってもらわなければ！」と。これは、こー、個人的なコレクションだから、いいコレクションだ。わたしはどれだけ薦められても、好きでもない絵を買ったことはない。絵は友人だから、一緒に生活するとなると、きー、気が合わないといけない。専門家の忠告は聞くが、自分で決めてきた。コレクションは、もー、持ち主の個性を反映しているし、反映すべきであり、わたしの個性はわたしのコレクションが反映しているものだ。わたしは絵には、かー、関心がなく、税金を、のー、逃れるために買うのだと言われるのを聞く

たことがあるが、それがどういう意味か、どうすればできるかなんて、誰が知るもんか。

しかし、それなのに、世間の人は、ことに妬みからか、嫉妬からか、それとも単に意地悪をしたいだけなのか、いろいろとひどいことを言う。確かに、わたしの持っている絵には大変な価値がある。いくらかは全く分からないがね。わたしは、しー、処分する手筈を整えた。

「続けて」財産の一部としてライザのところに行くものもあるれば、ロンドンのいろいろな画廊に行くものもあるし、この近くの画廊に行くものも二、三あるが、人が驚くような計画をしているものもいくつもある。

モームはケニンをじっと見る。

君は絵についてもっと学ぶべきだが、他人から教わってはいけない。価値とか、評価とか、評判の問題ではなくて、感情の問題なんだ。自分の目を通して学ばなければいけない。分かるかな？

ケニン

一九五四年。ロンドン。

今夜、ロンドンの有名な性悪女は、モームの名前が話が出ると実に強気に振る舞う。そいつは近所にいるモームを好きでない数少ない中の一人で――

突然、モームはロンドンの性悪女になる。

――こんなふうだ。

モーム

「客をもてなす性悪女のように」でも、皆さん、冗談言っちゃいけないわ！ 優しいですって？ それどころか、あの人は悪魔の化身よ。いいこと、あの人はキリストの敵だわ！ いえ、ちよつと待って、言わせてちょうだい。あの人は例のあの人にある特別な感情を抱いていたのよ。それが何年も続いたわ。ずっとね。あの人はその彼に対して素晴らしかった――あの人はちつとも気前がよくないの、知ってるでしょ、でも実際、この特別なお友達には惜しまずにものを与えたわ。あの人が上げたものの中に鍵付きの美しい金蒔絵の飾りダンスがあつて、例のあの人は個人的な手紙や書類を全部その中に入れて保管していた。ところが、ある朝、ウイリーが驚いたことに、お友達は突然結婚したことを発表したの――素敵じゃない？――ある大金持ちの婆さんとよ。もちろん、ウイリーは怒り狂って――かんかんになって――お友達がそれが自分たちにもういふ関係があるのか分からないって言うのと、ウイリーはその人に思いつく限りの悪口を言ったんだけど、その悪口たるやかなりの数だった。

それから、ウイリーは自分の手紙を返すように要求した。ちよつと想像してみてくださいよ、あの老いぼれは愚かにも手紙を書き書いてただけど、お友達は望んでも無駄だと言ったのよ。ウイリーはあらゆることを試みた――何とまあ、わたしにまで聞いてきたから、苦しめてやったわ――でも、全く無駄だった。それから、こうなったのよ。あの人はずっと運のいい爺だったけど、その運が続

モーム

いていたわけ。ある晩、お友達は本当に死んじゃった——運動のやり過ぎでね！
ウィリーは朝のお茶を飲みながらそのニュースを読んで、すぐにベッドから出ると、縞のズボンとモーニングと黒のネクタイを身に着け、山高帽を被って、正にお悔やみを述べる人最初の人になった。あの人は一時間いておろおろしている未亡人と話をしてから、ようやくいよいよ帰ろうという時になって、彼女にキスして言ったのよ。「この飾りダンスはわたしが上げたものでしたね」って。「続けて」「ええ、知ってるわ」って、未亡人は言った。「あの人はそれが大好きでした」って。「でも、ずっと了解済みのことなんですが」って、ウィリーは言った。「もし何かあったら、わたしに返してもらおうことになっていたんです」って。

「ええ、持って帰ってください」って、彼女は言った。「あの人は大いにそれを望んだらうと思います」って。

すると、ウィリーは——さあ、ここをよく聞いてよ——外にトラックを待たせてあって、玄関のドアのところまで行って開けると、トラックの雇い人たちを招き入れて、何が起きているのか誰にも気づかれないうちに、飾りダンスと手紙とよく分からないけどほかのものをその場から持ち去ったのよ。

この話はみんな知ってるわ。もちろん、いろいろと違いはあるけど、わたしが話したのが本当の話だって誓うわ。

だから、わたしにはあの古いぼれの話はしないでちょうだい。あの人のことは何から何まで知ってるんですから。あの人はロンドン一の悪党よ！」。

「二番目の悪党だわ」と、ルースが言います。

「客をもてなす性悪女のように」何ですって？

「何でもないわ」。

「客をもてなす性悪女のように」まあ。

ケニン

一九四六年五月。ニューヨーク。

今夜はコロニーでモーム、ヴィヴィアン・リー（イギリスの映画女優）と一緒に夕食。不思議なことに、二人は今まで会ったことがない。すべて最高の気分が始まる。ヴィヴィアンは恋に落ちる。モームはどうかと言え、わたしは彼のこういう一面を見たことがない——女性に親切な一面、優雅な紳士の一面、女性をものにしようにする男の一面。二人の間にあらゆる熱い本能的なやりとりが交わされる。ヴィヴィアンは、驚くべき博識、広範な読書、美しいフランス語、見事な話しぶりで非常に深い感銘を与える。そこにおいて黙って聞いているのは一つの楽しみだ。彼はわたしが聞いたことがないほど見事にお世辞を言う。わたしはほとんどじゃま者のような気がするが、立ち去る気にはなれない。カクテルとワインがあり、食べ物も素晴らしい。

ケニン

「続けて」改めて、わたしはちみんが会話の、特に、うちとけて交じり合うことの深い喜びを発見する。しかし、夕食後、わたしはこう言って、その晩最初のへまをする。「ステインガー（辛口のカクテル）はどうですか？」。

モーム

やれやれ、わたしはここ何年もその危険な混ぜ物は飲んでいない。

ケニン

「わたしは飲んだことがないわ」と、ヴィヴィアンが言う。それで、ステインガーを注文すると、思った通りのことになる。やがて、わたしは自分がモームにこう言うのが聞こえたのだから、わたしのステインガーがわたしを地球の表面から引き離れたのに違いない。

「モームに」先日の夜、ヴィヴィアンとわたしはひどい喧嘩をしたんですが、それは全部あなたのせいなんです。

どうしてなんだ？

ケニン

それは、わたしたちはあなたの本について話してたんです。『Then and Now（昔も今も）』（一九四六）ですよ。それで、わたしはその中に出てくる芝居に触れて、『マンドラゴラ』（ニコロ・マキャヴェッリ作 *Mandragola* 一五一五—二〇）と言ったんです。それがアメリカの言い方ですから。少なくとも、わたしがアメリカン・アカデミーにおいて、テストの芝居として第一幕をやった時はそう言っていました。

「観客に」モームは眉を吊り上げます。ヴィヴィアンが話しましたが、わたしはそうさせません。

「モームに」

イギリスでは違う言い方をし、イタリアでも違うのは知っていますが、わたしたちは『マンドラゴラ』と言います。それで、当然、ここにいる友達はひどく辛辣にわたしをこきおろして——

「観客に」ヴィヴィアンが遮りました。「ひどく辛辣ということとはなかったわ」と彼女は言いました。「どうして彼がそんなにかたくなに言い張るのか分からないわ。『マンドラゴラ』って発音することは、わたしたちはみんな知ってるのに」。

「続けて」わたしは再度受けて立ちます。

「ヴィヴィアンに」

ちよつと待ってよ、君。ちよつどここに一番確かな筋があるんだから。モームさん、正しい発音はどうなんですか？

さて、わたしの知る限り、間違いなくその芝居のタイトルは、『マー、』マー——

モーム

モームはステインガーを一口飲む。

発音は断然、『マー、』マー——

「観客に」わたしはぎよつとしました。わたしたちの神経の高まりの何かは彼に伝わってこのように『マ』でつかえてしまったのです。

ケニン

モームはなおも言おうとしている。

この場合、ほかの言葉に変えることはできません。テーブルの下で彼が指を鳴らし、手の平を叩いているのが見えました。

モームはそうする。

モーム

テーブルの上では、なおも悲痛な顔でこの言葉を吐き出そうとしていました。「やっと」『マー』、『マー』、『マジエナメーリンゴラメードランローロ』だ！

ケニン

「観客に」「ほら！」とヴィヴィアンが言いました。「わたしは何て言ったかしら？」。

一九五四年十二月。ロンドン。

今夜、ジェイミー・ハミルトン（イギリスの出版社、ハミツシュ・ハミルトンの社長）の家で、夕食の後、女性陣が食堂から応接間へさがると、ジェイミーは結束を固めようとわたしたちみんなを誘った。ポートワインが出て、葉巻とまとまりのない会話。

突然、みんなが死亡記事のことを話しているのに気づいて驚いた。『タイムズ』（イギリスの日刊紙）のオフィスで死亡記事を準備するやり方、誰が書くのか、誰が指示するのか、特にいいのはどれか、おそまつなのはどれか等々。

ジェイミーがわたしに尋ねた。「もちろん、アメリカにはこういうのはないよね？ 書き直し記者に死亡記事のページ用に急いで作らせるだけ、そうじゃないの？」。

ケニン

「続けて」わたしはそこに静かに座ってタバコを吸っているモームから注意をそらすことができなかったので、「さあ、残念ながら、知らない」としやがれ声で言った。わたしは興味を転じることができるようになると、誰かほかにわたしを考えていることを考えている人間がいるか確かめようと見回した。わたしが考えていたのは、何と言っても、八十歳のモームがいる前でこの話題を持ち出したのは全く気が利かないか、少なくとも、思いやりに欠けるか無分別だということだった。

彼は気にしていないようだった。さらに、ジェイミーはライバルの出版者の死亡記事を書いてくれと頼まれたことを話した。ケネス・クラークは最近の死亡記事のいくつかを誰が書いたか知っていた。やがて、わたしはこの話題から離れるべきだと思っていることをジェイミーに目で知らせることができた。彼は同意して、すぐほかの連中と意志を通じ合った。長い間があつた。テーブルに着いている誰もが失策を申し訳なく思い、数秒は誰も次に言うべきことを思いつかなかったと思う。

突然、モームが甲高い声を上げた。

モーム

わたしは自分のを読んだことがあるんだ！

ケニン

クラーク…「そうなんですか？ そりゃ、随分珍しい」。

モーム

なに、送ってくれたんだ——編集者が。彼は、よー、よければ正確を期すためにチェックしてもらえないかと聞いてきた。だから、そうした。

翌日、彼が訪ねて来た時に、わたしは言った。「まあ、十分、せー、正確だが、とても十分な、おー、思いやりはないと思う」。それで、彼は手を入れることを

求めてきて、わたしはそうした。請け合うよ、今度は十分、おー、思いやりがあるって！

ケニン

「観客に」その夜遅く、モームはちよつとした話をします。ロンドンに、入念な計画に基づいて組む、有名で本格的なサロンを続けている女主人がいました。いつの場合も特別なテーマがあつて、その高貴な女性がいました（いまいいことに、名前は聞き取れません）。彼がいいかげんに発音したからですが、彼にもう一度言ってくれと頼むことで、このことに注意をうながしたくありませんでした）。とにかく、その女性は一つのテーマを選ぶと、その特別なテーマに関するイギリスの最高権威の十人とか、十二人とか、二十人に出席してもらうべく招待するのです。すべての大きなサロンのように、男だけのイベントでした。女性一人がすべてを運営し、男性客たちは女性を同伴していません。ある晩、彼が話そうとしている晩は、バイロン卿（イギリスのロマン派詩人）がテーマでした。モームは招待されましたが——全く理由が分かりません。実際、バイロンについて書いたことや話したことはありますが、どう考えても自分が権威だとは思えません。

モーム

彼女だつてそうなのは明らかだつた。こういうイベントでは、きー、客は肩書きとか、社会的地位とか、年齢ではなく、その夜のテーマに関する専門知識の、じー、序列に従つて座らされた。当然、わたしは、まー、末席のどこかに座らされた。

ケニン

「観客に」彼は、彼女がタイミングよくちよつどいい質問をはさみながら、いかに見事にすべてを仕切っていたかを話し続けます。このテーマ以外、会話に適したものは全く考えられませんでした。

モーム

彼は、ものすごく感動的な話や説得力のある意見を聞いたと言います。ほとんどは女主人の右側に座っている第一人者が話していた。だが、夜も更けるにつれて、彼女は二番目の権威だと聞かされていた男、つまり彼女の左側に座っている男が何も言っていないことに気づいた。彼は食べ物を楽しみながら興味を持って聞いているようだったが、一言も加わっていなかった。彼女は会話の舵を取る熟練のテクニクを使いながら、都合のいいタイミングを見計らつて、彼の方を向いて言った。「ところで、先生のお話を伺っておりませんわ」。

「ええ、奥方」と彼は答えた。「それでいいんです。だって、わたしはバイロンになんかちつとも興味がないんですから！」。

当然、彼女はびつくりして尋ねた。「まさか！ どうしてですか？」。

「なぜなら、奥方」と彼は答えた。「バイロンはゲイだったからですよ！」

女主人はフォークを落として目の前のものをバチャバチャはね飛ばすと諷めた。「まあ、あなた。何てこと。いえ、そんなことあり得ないわ！」。パニック状態になつて、彼女は右側の男に訴えた。「そんなことがあり得るの？ 本当じゃないでしょ？」。

第一人者は険しい顔をして答えた。「いいえ、奥方、残念ながら、本当に本当のことです。ご質問にははっきりそうだとお答えしなければなりません」。

女主人は、その夜が台なしになったので、「あらまあ。あらまあ」とつぶやくだけだった。

その時、左側の男が、彼女を動転させてしまったことに気づき、彼女の腕を触って言った。「でも、晩年になって、彼が汚名返上したことをお知りになれば、あなたもお喜びになることでしょう——自分の、あー、姉と、ねー、熱烈な恋愛関係を持ったんですよ！」。

「続けて」たー、楽しく振り返ることができるとはこういう晩餐会だ。

モーム
ケニン
一九五八年六月。ニース。

今夜、わたしたちは晩餐会を開いた。ラ・レゼブルで、モームの八十四歳の誕生日を祝うためだ。その中で、わたしはモームに尋ねた。

「モームに」

生きることを学ぶのにどのくらいかかりましたか？

モーム
ケニン
八十四年だ。

それで、どちらが難しいと思いましたが？ 生きることと、書くことと？

答えられないな。済まないが。

モーム
ケニン
「観客に」わたしたちはしばらくほかのことを話します。それから、間があった時に

君の質問にほかの方法で答えさせてくれたまえ。言わせてもらおうと、わたしは常に書くことを楽しんできたが、生きることを楽しんだことはない。

ケニン
「観客に」コーヒーの間です。

「モームに」

あなたの作品の素晴らしいことは、あなたが常に真実を虚構のように見せ、虚構を真実のように見せることができることだと思えます。

モーム
ケニン
特別な賛辞として受け止めて、礼を言うよ。

一九五一年。サン・ジャン—カップ・フェラ。

今日、わたしは彼に、作品の中で作家として、カットすることに関して何らかのルールや原則に従うのかどうかを尋ねる。

ああ、何かをカットしようと思いつけば、カットする。

モーム
ケニン
一九五三年。ロンドン。

彼が小さく見えるのはいつもの通りだが、今夜はより一層そう小さく見える。どうしたんだろう？ 本当に縮んだのか？ 以前より体重が減っているのは確かだと思う。それに、なぜか体形が変わっていることも。夜の終わる頃、彼が言う。

人が小さくなったら、わたしみたいに、死神が見下ろしている可能性があると思う。

ケニン
一九五四年。クリスマス。パリ。

今夜の話は、アバーノ、モンテカティーニ、バート・ガスタインでの療養について。ニューイングランドの食べ物と、彼が大好きなボストンのベークドビーンズ（インゲン豆のトマトソース煮）について。それから、性的な力の位置づけについて。

モーム

性的な力。フランス人は主として話の中にそれを持っている。彼らはあのことについて話すのが大好きだ。アメリカ人は心の中に持っている——あらゆる感情とロマンチックな概念の中に。ロシア人は——腕と脚と胴に——あのハグには背骨が折れそうになる！ ドイツ人は、知的に考え、哲学的に考え、分析的に考えるために頭の中に持っている。さて、イタリア人は——そう、イタリア人ね。彼らのは生殖器の中にあつて、彼らは地上の恋人たちだ。我々は皆、彼らから学んだらどうだろう。

ケニン

イギリス人はどうなんですか？

モーム

いや、彼らは全く持っていない——どこにもね！

ケニン

一九五四年十二月。ロンドン。

モーム

我々は誰も変化を好まない。だが、流行は盛衰する。思い出すのは、『お菓子とビール』が、どー、道徳的な見地からショッキングな本だと考えられて、出版すべきかどうかが問題になるほどだった頃のことだ。今日印刷されているものと比較してみたまえ。しかも、あれはほんの二十五年ほど前のことにすぎない。わたしは『The Constant Wife (貞淑な妻)』（一九二六）の中で物議をかもし一行を書いた。

モーム

「続けて」あれは、まー、全く罪がなく、効果的でリアルだと思ってたんだがね。あれは、第三幕の若い女とその、はー、母親が男について議論する場面に出てくる。娘が尋ねる。「恋してるってことはどうしたら分かるの？」。母親が答える。「ねえお前、調べる方法は一つしかないと思うわ。お前はその人の、はー、歯ブラシを使えるかい？」。

「そりゃ、できないわ」と娘が言う。そして、母親が言う。「それじゃ、お前はその人に恋して、なー、ないんだよ」。多くが行き過ぎだと言った。わたしは憤りの手紙を何通ももらって、一時は、例の下品で悪趣味な受け狙いの安っぽい、げー、劇作家として悪名が高かった。あのちよつとした警句と今世間が耳にするものを比べたまえ、どうだろう？

ケニン

「観客に」わたしたちはさらに時の流れとそれによって生じる問題について話します。わたしが示唆するのは、最も賢明なやり方は、大成功したらすぐに死んでしまうことで、そうすれば、何年もの間、世間が「ああ、彼が生きていたら、どんなことを成し遂げたのだろう！」と言うようになるだろうということですよ。

モーム

わたしは一八九七年に『ランベスのライザ』を書いた。それは大評判にはならなかったが、ちー、ちよつとした成功作だった。とー、当時、最も著名だった批評家、エドモンド・ゴスが気に入ってくれて、素晴らしい批評を書いてくれた。彼のことはよく知らなかったが、時たま会うことがあつて、それ以来四十年、会うたびにわたしをいたわるように見て言うんだ。「ああ、そうだ、モームだ。『ランベスのライザ』ね。すごくいい本だった！ ほかに何も書かなかったなんて、君は何て賢明なんだ！」って。

ケニン 「モームに」何年もの間、あなたに聞くつもりだったことがあるんです——決着をつけるために——こまごましたことの。

モーム 急いだ方がいい。わたしを見たまえ——もっといいのは、カー、カレンダーを見たまえ。

ケニン いいえ、結構です。

モーム 先日、ノエル（ノエル・カワード、イギリスの俳優・作家・脚本家・演出家）がここで言ったんだ。「最近、友人に求めるのは、ランチの間は最後までもってくれということですよ」って。

ケニンはほほえむ。

こまごましたことって何かな？

ケニン 戦時中、サウスカロライナにいた時のあなたのことです。

モーム ヤマシーだ、そうだ。素晴らしかった。

ケニン そして、あなたがダブルデイ夫妻に振る舞ったディナーのことです。

モーム オニオンスープ、トリュイット・オ・ブルー、カナール・ア・ロランジュ、エ
ンダイブ（葉菜）とビート（アオゲイトウ）の根のサラダ、アーモンドスフレだ。

ケニン それに、着いてからたったの一週間で用意したんです——十日だ。

モーム ——農家の若者独りだけで——

ケニン 「リリジャス」という名前だった。

ケニン ——恐らく、それまでにソウルフード（アメリカ南部黒人の伝統的な食べ物、豚の小腸（脚）・サツマイモ・トウモロコシパンなど）しか見たことがないでしょうに。それが、すぐ変われ！（奇術師の掛け声）——彼は最も無理な要求をする美食家のために食通用のディナーを作り出したんです。さあ、今こそ。本当なんですか？

モーム ああ、そうだ、本当に本当だ。

ケニン でも、ダブルデイ夫妻が完璧なディナーだったと言うようなものを、間違いなく今までにそんなことをやったことがないあの若者しか使わずに、どうやって出したんですか？ 信じがたいことです。

モーム 実は、めー、面倒じゃないんだ。ちっとも面倒じゃない。同じ食事を八晩続けて食べるのを面倒だと言わなければね！

ケニン なるほど、先生、あなたに賛成するにしろ、反対するにしろ、言えることは、あなたは現実的な方だということです。

モーム それはわたしに賛成しているのかね、それとも反対しているのかね？

ケニン 分かりません。両方じゃないですか。ソーントンがこの話題について言ったことがありません。彼は言いました。「不滅の霊魂は自分で始末できるが、洗濯物は誰が始末してくれるのだろうか？」と。

モームは笑う。

モーム この次ソーントンに会ったら、ある、げー、現実的な爺さんが言ってたと伝えてくれたまえ。洗濯物を自分で、ちー、ちゃんと始末すれば、不滅の霊魂はなるようになるよ。

モームは警告するように指を一本上げる。

絶対にその逆じゃないぞ！

ケニン 「観客に」すべてが愉快で奇抜だったので、わたしたちは笑っていましたが、突然モームは真顔になります。

モーム いや。たとえどんなにみじめでも、人生は、しー、しっかりつかまなければ。

ケニン 「モームに」ルースが時々言うんです。「生きていればそれだけのことはあるわ」って。

長い間。

モーム 「落ち着いて」ルースの、いー、言う通りだ。

幕。

